

2015年2月12日  
第6回知の市場年次大会

拠点:東京・筑波大学

## サイエンスコミュニケーション実践論

連携機関 :筑波大学/日本サイエンスコミュニケーション協会

筑波大学教授 渡辺政隆

日本サイエンスコミュニケーション協会理事 高安礼士

### 1. はじめに

今日、自然環境や社会と科学技術イノベーションとの関係深化に向けて、国民の政策過程への参画、リスクコミュニケーションも含めた科学技術コミュニケーション活動を一層促進するための取組が重要とされています。科学技術イノベーションは、自然環境や社会と国民の期待と不安を十分考慮するとともに、研究者、技術者、研究機関と連携し、科学技術の可能性、リスク、コストについて、国民に率直に説明し、その理解と信頼と支持を得ることが重要であり、一般市民の科学技術リテラシーの涵養とそのための方策としてサイエンスコミュニケーションの重要性がましています。

このような状況下で、日本サイエンスコミュニケーション協会は2012年1月、「21世紀型科学教育の創造 (<http://www.sci-edu21.org/>)」(2003年～2010年、研究活動、ワークショップを実施)メンバーが核になって一般社団法人として設立しました。「サイエンスコミュニケーションを促進することにより、社会全体のサイエンスリテラシーを高め、人々が科学技術をめぐる問題に主体的に関与していける社会の実現に貢献する」ことを目指して活動しています。

### 2. 知の市場での実績

知の市場では、2012年度～2014年度の3か年にわたり「サイエンスコミュニケーション実践論」を開講し、サイエンスコミュニケーションの意味、科学館や天文台を中心としたサイエンスコミュニケーション、産業技術をめぐるサイエンスコミュニケーションについて学び、サイエンスカフェの紹介を行った。

### 3. 2015年度前期講座の内容

2015年度も筑波大学大学院共通講座として、茗荷谷キャンパスにて社会人大学院講座として実施する。講座内容は、より実践的な内容を取り上げ、学生の教養科目のみならず研究開発や科学教育及び企業活動等の現場で必要とされるより実践的な知識・技術の習得を重視する。

2015年2月12日  
第6回知の市場年次大会

拠点:東京・筑波大学

## リスクコミュニケーション入門

連携機関 :筑波大学/日本サイエンスコミュニケーション協会

筑波大学教授 渡辺政隆  
日本サイエンスコミュニケーション協会理事 高安礼士

### 1. 目標

21世紀の今日、「知識のための科学」や「産業のための技術」に加えて「社会における、社会のための科学・技術」の重要性が認められるようになった。科学・技術の本質を理解し、適切に技術を選択し、社会の課題に主体的に関与し判断できるように、市民にも「科学・技術リテラシー」が求められている。同時に、「科学・技術リテラシー」向上のために、リスクコミュニケーションの重要性が認識されている。科学・技術に対する理解・関心・意識を深め、多様な意見の存在を知り、合意形成につながる活動としての「リスクコミュニケーション」の事例を紹介し、その理論と実践的技術を学ぶ。

### 2. リスクコミュニケーション講座とは

サイエンスコミュニケーション実践論では、サイエンスコミュニケーションの手法や評価を、文献やアンケート調査結果などを中心とした研究や実践例の分析などを通じて紹介される。本講座では、生活と密接な関係を持つ科学・技術のリスク(感染症、くすり、食品添加物、遺伝子組換え作物・食品など)をめぐるコミュニケーションを実践している専門家から、現状・課題について説明する。受講生は、各自が直面したり、関心を持っていたりしている事象に関するリスクコミュニケーションに当てはめて、自分の問題として捉え、共考する。特定のリスク情報を伝えるリスクコミュニケーションの場を想定し、どのように伝えたらよいか、どのような場を創出すると対等な対話ができるのか、を考えながら演習を行う。演習では、評価表を用いて、互いのリスクコミュニケーションの評価を行い、今後の活動に役立てる。

### 3. 知の市場 2015年度後期講座の内容

知の市場では、2014年度後期には学生のみならず社会人が実務として必要とされるリスクコミュニケーションに対応できる講座内容としたが、2015年度はより社会的な文脈と視点からの「リスクコミュニケーション理論の構造」を紹介する。

2015年2月12日  
第6回知の市場年次大会

拠点:千葉・千葉

## サイエンスコミュニケーション実践論 a・b

連携機関 : 千葉市科学館

一般社団法人 日本サイエンスコミュニケーション協会(JASC)

千葉市科学館 高安礼士

### 1. はじめに

国は、「科学技術イノベーション政策の策定と実施に際し、自然環境や社会と国民の期待と不安を十分考慮するとともに、研究者、技術者、研究機関と連携し、科学技術の可能性、リスク、コストについて、国民に率直に説明し、その理解と信頼と支持を得ることが重要である。」とし、自然環境や社会と科学技術イノベーションとの関係深化に向けて、国民の政策過程への参画、リスクコミュニケーションも含めた科学技術コミュニケーション活動を一層促進するための取組を推進しています。

これらの新しい科学技術基本計画では、一般市民の科学技術リテラシーの涵養とそのための方策としてサイエンスコミュニケーションの重要性が述べられています。

### 2. 日本サイエンスコミュニケーション協会とは

日本サイエンスコミュニケーション協会は2012年1月、「21世紀型科学教育の創造(<http://www.sci-edu21.org/>)」(2003年～2010年、研究活動、ワークショップを実施)メンバーが核になって発足した一般社団法人である。「サイエンスコミュニケーションを促進することにより、社会全体のサイエンスリテラシーを高め、人々が科学技術をめぐる問題に主体的に関与していける社会の実現に貢献する」ことを目指して活動しています。

### 3. 知の市場での活動

知の市場では、2014年度「サイエンスコミュニケーション実践論 a・b」を開講し、前期はサイエンスコミュニケーションの意味、科学館や天文台を中心としたサイエンスコミュニケーション、産業技術をめぐるサイエンスコミュニケーションについて紹介し、後期はさらに実践的な視点から、リスクコミュニケーションの実践事例やサイエンスカフェの演習を行った。東北地方や九州からの参加もあり、科学館単独実施の集客とは異なる成果をあげている。

### 4. 2015年度開講講座

2014年度は、前・後期講座の間に2ヶ月の休みを入れたために、後期の出席実績が悪化するという結果を反省し、連続して一体となる講座を計画した。内容的には、「入門」的な要素が多くなるが、サイエンスコミュニケーションの基本概念の習得を目的とした。

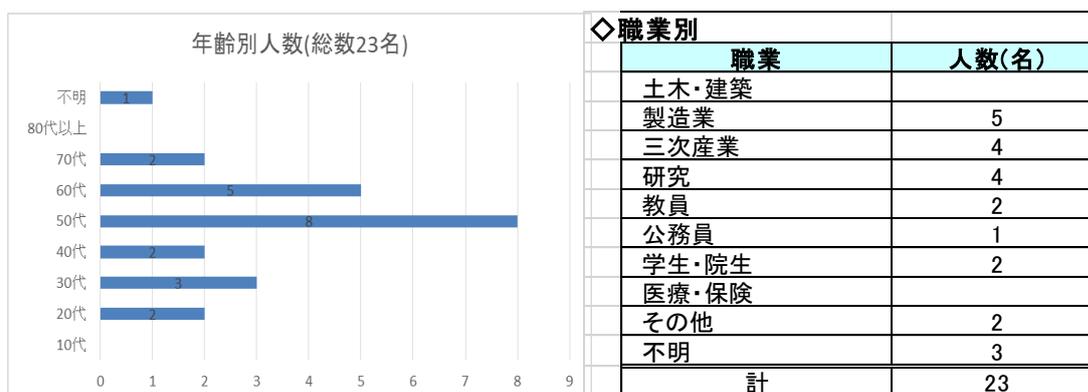
### (1) 目標

21世紀の今日、「知識のための科学」や「産業のための技術」に加えて「社会における、社会のための科学・技術」の重要性が認められるようになった。科学・技術の本質を理解し、適切に技術を選択し、社会の課題に主体的に関与し判断できるように、市民にも「科学・技術リテラシー」が求められている。同時に、「科学・技術リテラシー」向上のために、リスクコミュニケーションの重要性が認識されている。科学・技術に対する理解・関心・意識を深め、多様な意見の存在を知り、合意形成につながる活動としての「リスクコミュニケーション」の事例を紹介し、その理論と実践的技術を切れ目なく学ぶ。

### (2) 概要

サイエンスコミュニケーションの手法開発や評価が、文献調査やアンケート調査などを中心とした研究や実践例の分析などを通じて行われている。本講座では、生活と密接な関係を持つ科学・技術のリスク(感染症、くすり、食品添加物、遺伝子組換え作物・食品など)をめぐるコミュニケーションを実践している専門家から、現状・課題について説明する。受講生は、各自が直面したり、関心を持ったりしている事象に関するリスクコミュニケーションに当てはめて、自分の問題として捉え、共考する。特定のリスク情報を伝えるリスクコミュニケーションの場を想定し、どのように伝えたらよいか、どのような場を創出すると対等な対話ができるのか、を考えながらサイエンスカフェ等の演習を行う。演習では、評価表を用いて、互いのリスクコミュニケーションの評価を行い、今後の活動に役立てるようにする。

### 参考資料:参加者の年齢構成と職業分類



職業	人数(名)
土木・建築	
製造業	5
三次産業	4
研究	4
教員	2
公務員	1
学生・院生	2
医療・保険	
その他	2
不明	3
計	23